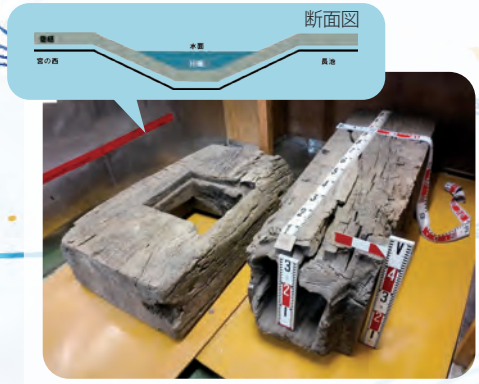
知恵と技術で築く用水施設

「小笠地域かんがい用水群」は、3つの用水路と7つのため池、計10施設で構成されています。中でも代表的な施設が、加茂用水です。

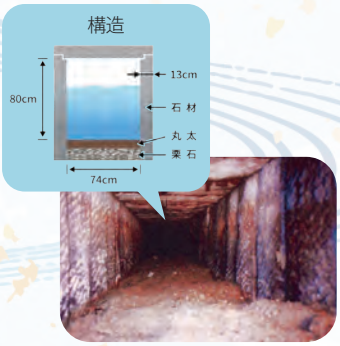
加茂用水は、1594年（文禄3年）に整備された用水路で、全長はおよそ8キロに及びます。かつて5つの村の水田を潤し、地域の農業を支えてきました。400年以上前に造られた施設が、形を変えながらも今なお地域の農業を支える仕組みの一部として受け継がれています。

加茂用水で特に注目されるのが川と水路が交差する場所に設けられた木製の「龍樋（たつどい）」です。これは、水路が川を横切る際、水が混ざったり遮られたりしないよう、川の底をくぐらせて立体交差させるために作られた木製の地下水路で、現代の土木技術にも通じる発想が、当時の地域の人々によって実現されていました。



加茂用水 龍樋（たつどい）の一部

加茂用水の他に、掛川市にある十内坎（じゅうないいり）は、1646年（正保3年）に造られた施設で、天井川となっていた西大谷川の下を通して水を導くため、石造りの埋樋（うめどい）（地中に埋めておいて水を通す樋）が設けられました。防水性を高めるための工夫も施され、当時としては非常に高度な技術が使われていました。



十内坎（じゅうないいり）　内部

また、嶺田用水は江戸時代前期に整備され、一級河川・菊川の水を取り入れて広い範囲の農地を潤してきました。

小笠地域では、このように自然条件に応じた多様な工法が取り入れられ、水を確保するための努力が積み重ねられてきました。こうした水利の発展は、地域全体の農業を支えてきた共通の財産です。

広がる水のネットワーク

小笠地域では、用水路の整備と併せて、多くのため池が築かれ、地域の水利用を支えてきました。中でも西方にある奥山上池・中池・下池は、山間部の谷に堤を段々に築く「連珠式ため池」と呼ばれる構造です。水量確保と破堤リスクの低減を両立したこの築造法は、本地域発祥で、江戸時代に成立した農書『百姓伝記』にまとめられ、全国へ普及しました。

さらに、複数のため池を水路や隧道（ずいどう）（山を越えて水を送るトンネル）でつなぎ、より広い範囲で水を融通できる仕組みが整えられていきました。ため池ごとに水をためるだけでなく、それぞれを結びつけて地域全体で活用することで、干ばつへの備えを強めていったのです。

このような水利ネットワークは、小笠地域の大きな特徴です。単独の施設が機能するだけでなく、複数の施設が連携して地域全体を潤す仕組みが築かれたことが、今回の世界かんがい施設遺産登録という高い評価につながっています。


奥山上池・中池・下池（公文名）

進化した水利の仕組み

小笠地域のかんがいの仕組みは、近代以降も発展を続けました。1947年（昭和22年）から始まった大井川用水の整備により、大井川からの水がため池にも補給されるようになり、小笠地域のかんがい機能はさらに強化。地域全体で干ばつ被害を軽減しながら、安定した農業生産が可能になりました。

現在でも、こうした歴史ある施設群は地域の田畑を潤し続けており、先人たちの築いた仕組みが、現代の暮らしや農業にしっかりと息づいています。

地域の財産を未来へ

今回の世界かんがい施設遺産への登録は、単に歴史的な施設が評価されたというだけではありません。水不足という地域の課題に向き合い、農業と暮らしを守るために力を尽くした先人たちの努力や知恵、そしてそれを守り続けてきた地域の営みが、国際的に認められたものです。

実際に、加茂用水、嶺田用水、十内坎（じゅうないいり）の開発者は、いずれも水神や仏として祀られ、地域の人たちによってその偉業が大切に守り伝えられています。

「小笠地域かんがい用水群」は、地域の成り立ちや農業の歴史を物語る大切な財産です。今回の登録をきっかけに、身近な地域資源としてその価値をあらためて知り、次の世代へ受け継いでいきます。先人たちがつないできた「水の道」を、これからも地域の誇りとして大切にしていきましょう。



中条右近太夫没後400年祭祀（ちゅうじょうこんだゆう）の様子


加茂用水 井成神社


嶺田用水 井宮神社